

## GPAI SUMMIT 2022「仕事の未来」サイドイベント -学生コミュニティとの対話 開催報告

日程：2022年11月22日（火）

時間：15:30-17:00 (JST)

会場：ホテル椿山荘東京とオンライン配信(ハイブリッド)

主催：東京大学未来ビジョン研究センター

2020年6月に設立された GPAI(Global Partnership on AI、AIに関するグローバルパートナーシップ)は、「人間中心」の考えに基づく責任ある AI の開発と使用に取り組む国際的なイニシアティブです。GPAI にはいくつかの作業部会が設置されており、その中には「仕事の未来(Future of Work)」を議論する部会があります。この部会のプロジェクトとして、AI が職場に導入されることで、私たちのワークスタイルがどのように変化していくのか、世界各地でインタビュー調査を行っています。本調査の特徴は、学生によるインタビュー調査であることです。

本イベントでは、「仕事の未来(Future of Work)」部会の調査プロジェクトに参加する欧州、インド、日本の学生メンバーが集まり、それぞれの地域における活動の紹介と、調査活動から得られた経験を共有しました。

(本イベントは、2022年11月22日に開催された [GPAI サミット 2022](#) のサイドイベントとして開催しました。)

まず冒頭の開会挨拶で、「仕事の未来」部会で 2020-2021 年に共同議長を務められた東北大学の原山優子氏が、本部会に学生の参画を促した背景について紹介しました。AI による労働環境への潜在的な影響を明らかにするには、今何が実際の仕事に起こっているか、現場の確認が必要であること、またそれらの調査に未来の労働環境の影響を受ける学生が主体的に取り組むことで、今後の活動につなげることを目的としています。今回のイベントを通じて、各地域の学生コミュニティ同士がグローバルにつながって知見が共有されることへの期待が示されました。

前半では、各学生チーム（欧州、日本、インド）代表が、各地域の活動について紹介しました。まず欧州チームからは、チームを率いるヤン・ファーガソン氏（トゥールーズ工科大学）が学生に代わって、AI オブザベーションプラットフォームの1年目の調査を振り返りました。欧州チームには、社会科学分野の博士課程の学生5名が参画し、スペイン、フランス、カナダ、イタリア、メキシコ等7か国30事例を収集しました。そしてそれらのケースを OECD 原則の観点から分析する作業をした旨が報告されました。

次に日本チームの活動について、同志社大学社会学部4年生の齋藤恭寛さんと堀井みずずさんから、発表がありました。今年が2年目の調査活動であり、参加大学と学生数が昨年より増え、同志社大学に加えて東北大学と東洋大学、さらにアジア地域から香港科学技術大学が参加している点が特徴的であることが紹介されました。また、プロジェクトに参加することによって、企業とのコミュニケーション等の調査準備プロセス自体にも学びが大きかったこと、AI導入には、推進する部署と実際の使用現場では受け入れ格差があること、また、実際にはAIと有効に協働していこうとする例が多かったことが当初持っていたマイナスイメージと異なる発見だったと述べました。

最後にインドチームからは、インド工科大学博士課程に所属するアシラ・クリスマンさんと、修士課程に所属するムディタ・デュベイさんが、本プロジェクトで行っている研究活動について紹介しました。仕事の未来とAIを取り巻く課題には、消費電力、信頼性、データプライバシー、バイアスデータ、人権といった課題があり、AIデザインの未来に向けて、どのようにテクノロジーを組み合わせ、オープンでアクセス容易なシステムをデザインするか考えていく必要があるということ、またそのためにベストプラクティスを収集して、効率的にパフォーマンスの高いソリューションへつなげていくことが重要であるという点が強調されました。

続く後半のパネルディスカッションでは、東京大学の江間有沙氏が進行し、学生が調査に参加して得られた経験や気づきについて意見を交換しました。

まず初めに、「各国・地域特有の課題」について議論しました。オーフス大学でテクノロジーとビジネス開発を専攻するアルジャンドラ・ロジャさんは、インタビューを実施したメキシコの現状について、規制が未整備であり、現状は他国の状況を伺うような姿勢がみられること、また同様に調査を実施したスペインでは、各企業によるチェックやモニタリングの体制が課題となっているとコメントしました。また、ジャスティン・ディマさんは、カナダの企業について調査した経験から、カナダではAI開発が急速に進んでおり、労働環境においても高い期待が寄せられている一方で、倫理的側面については問題が発生してから初めて検討する等、後手になっている印象があるとコメントしました。

日本チームからは、東北大学大学院工学研究科修士1年生の椎野直さんが、日本の傾向として、劇的な変化から従業員を守るといった姿勢がみられること、またクラフトマンシップの考え方も、テクノロジー導入の遅れに影響があると感じているとコメントしました。また同志社大学社会学部3年生の鎌倉優子さんは、AIテクノロジーのメリットを享受できる人とできない人がいるということ、例えばZ世代は何ら抵抗がない一方、高齢者は抵抗を感じる場合が多いというような世代間にギャップのあることが、超高齢化社会に向かう日本にとって課題になるとコメントしました。続いて、香港科学技術大学公共経営修士課程

修了生のハイユ・リーさんは、チームが研究対象とした香港および中国本土を拠点とする企業の、サステナビリティ関連領域における AI 利用状況について紹介しました。特に環境・エネルギー分野では様々なセクターで AI の活用が進んでおり、社会課題の解決へ向けたより包括的なソリューション推進に大きくインパクトを与えている印象があるとコメントしました。

またインドチームのデュベイさんは、インドの状況について、AI 浸透は欧米よりも進んでいる印象がある一方で、技術の理解が十分進んでいるわけではないという課題が示されました。同じくインド工科大学のタディパトリ・ウダイさんは、インドは多様性があり人口が多いというなかで、規制が未発達である点が課題だと強調しました。さらに、プラネイ・クマールさんは、技術的バックグラウンドがない層が多く、実際に何が起きているのか理解して使っている人が少ないことは問題であるとコメントしました。各学生からのコメントを受けて江間氏からは、それぞれの状況に文化的な背景があり、その点も GPAI への重要なインプットになると伝えられました。

続いて、「GPAI の活動から学んだこと」についても意見を交換しました。デュベイさんは、それぞれの国で社会的な側面をどのように扱っているかが興味深く、グローバルで考えること、社会への適用が重要であることに気づかされたコメントしました。ロジャさんからは、AI の利用には、使う側にどのようなスキルと経験が必要かを考えさせられたとコメントがありました。椎野さんは、将来の AI 技術の姿や応用の見通しのヒントが得られたということ、今後の未来像を示すことは GPAI に今後もっと期待したいと述べられました。ディマさんは、文脈を理解することの重要性、つまり最良の AI を開発しても、それを労働者が受け入れない限り有用性はなく、この要素を十分考慮する必要性への気づきがあったとコメントしました。

最後に「GPAI への提言」との問いに対して、鎌倉さんから、システム検証のプロセスに未来の仕事を担う若い世代の意見も取り入れることの重要性を主張していく取り組みや、また、先進国と途上国などの情報をグローバルに共有するインフラができればよいとの考えが示されました。情報共有については、特に学生間がグローバルにつながって知見共有や議論の場を設けていくことの重要性について他の学生からも同意見が多く出され、そのような機会推進の役割を GPAI に求めたいという声が共通の意見として示されました。

パネルディスカッションの最後には会場からも、今回の学生による調査活動について、アプローチや結果に非常に多様性のある取り組みであると評価する声をいただくとともに、同様のインタビューを、AI 規制に取り組む政策立案者に対して行うのも良いとの提案がありました。

最後に GPAI 専門委員である原山優子氏（東北大学）と、ヤン・ファーガソン氏（トゥールーズ工科大学）より、全体を通じた所感をいただきました。原山氏は、取り組みが期待以上の効果を見せており、今後さらにコミュニティを広げてグローバルで取り組んでいくことの意義を実感したと述べられ、また今後対象を広げることの可能性が示唆されました。また参加する学生の方々へは今後もこのネットワークを大いに活用してほしいとのエールが送られました。

ファーガソン氏からは、グローバルで現場のプラクティスを検証する GPAI の趣旨に沿った、とても有意義な取り組みであるとのコメントがありました。重要なのは、技術的視点だけではなく社会的な専門性を高めることであり、より人間的な視点で技術とのインターアクションを考えていくことが、効率的な技術適用につながります。その観点でも、参加した学生への今後の活躍に期待すると述べられました。また加えて新しい試みとして、AI オブザベーションプラットフォームとリビングラボをつなげて、各地域の情報をゲーム形式でインプットしてもらうことで、地域別の事例の収集につなげるような取り組みを検討しており、これらの取り組みにもぜひ今後参加をしていただきたいという期待が伝えられ、本イベントは閉会しました。









